

中将実方朝臣の墓



さくらがり
あめはふりさぬ
おぼしるは
ぬるとも
はなの
かげにかくれむ



名 称	構 造	所 在 地
中将実方朝臣の墓	土 饅 頭	名取市愛島 塩手字北野42番 (国有地)
	東 西 1.7m	
	南 北 2.2m	
	高 さ 0.3m	
	玉 垣 東西 2.2m × 南北 2.5m	

藤原実方像「百人一首画帳」より養朴常信筆

名取市・名取市観光協会

中将実方朝臣について

中古三十六歌仙の一人藤原実方朝臣は、曾祖父に摂政関白忠平、祖父は小一条左大臣師尹、御堂関白道長とは、又従兄弟の間柄である。実方侍従定時は早く亡くなったため、叔父権大納言済時の養子となり、生母は左大臣源雅信の娘といわれて藤原一門の中でも由緒ある家柄に生まれ、美貌と風流とを兼ね備えた貴公子である。

実方は天延3年侍従に任ぜられ、9年後には左近少将に、更に7年を経て一条天皇の正暦2年には右近中将、同じく5年には左近衛中将に任ぜられたのである。特に、和歌に関してはすぐれた才能があり、円融、花山両院の寵を一身にあつめていた。

ある年の春、殿上人がそろって東山に花見に出かけたところ、俄か雨に降られ大騒ぎになったが、ひとり実方朝臣は少しもあわてず木の下に身を寄せて

「桜がり雨は降りきぬ 同じくは

ぬるとも花の蔭にかくれむ」

と詠じ、降り来る雨に漏れて装束をしぼった。この事は当時大変な評判となり皆口々に実方の風流心をほめたたえ、翌日、大納言済信から主上にも奏上したところ、藤原行成これを批判して「歌は面白し、実方はをこなり」と云ったという。『をこ』とは馬鹿ということである。

後日、これを伝え聞いた実方は、殿上に於いて行成と出合いがしらに、行成の冠を取り庭へ投げ棄て立ち去った。この一件をご覧になった一条天皇は、「行成は召仕うべき者」と思召されて蔵人頭に補せられ、実方には「歌枕見てまゐれ」と言って陸奥守に任ぜられたのである。

中古三十六歌仙の一人、源氏物語の主人公、光源氏のモデルと言われる左近衛中将藤原実方朝臣は、こうして長徳元年(995年)9月27日、多くの人たちに別れを惜しまれ、華やかな日々を過ごした京の都を後にし、陸奥の国司として赴任して来られたのである。

陸奥守として下向の後、その事情を知った陸奥の武士たちに尊敬され、その待遇は従前の国司と異って昼夜の別なく奉仕されたとある。また五月の節句に、あやめふく風習がなかったところ、実方は「さみだれの頃など、あやめによりてこそ、今すこし見るにも聞くにも、心すむことなれば、はや葺け」と命じたので早速軒端にふいた。この風習は今に残っている。

こうして、みちのくにあること足かけ4年「歌枕見て参れ」との勅命により各地の名所旧跡をも訪ね歩いた。任期も間近にし、京の都の人たち

から帰りを待たれる頃、実方は出羽国千歳山阿古耶の松を訪ねての帰り道、名取郡笠島道祖神の前を、馬に乗りながら過ぎようすると、土地の人がこれを諫めて日く「この神は効験無双の霊神、賞罰明らかなり、下馬して再拝して過ぎ給え」と言ったが、実方は「下品の女神にや、下馬に及ばず」と無視して過ぎようすると馬が暴れて倒れ、落馬がもとで実方もまた病の身となり土地の人々の手当を受けたが、その甲斐もなく「みちのくの阿古耶の松をたずね得て身は朽ち人となるぞ悲しき」の痛恨の一首を残して、長徳4年(998年)11月13日、帰らぬ人となったと伝えられている。(源平盛衰記)

実方が辺境に死してのち189年、文治2年(1186年)の秋、西行法師がこの墓に詣で、霜枯のすすきを眺め「朽ちもせぬ其の名ばかりを留めおきて、枯野のすゝきかたみにぞ見る」と歌った。また、元禄2年(1689年)5月俳人松尾芭蕉が奥の細道をたずねた折、雨で道が悪く実方の墓へ参ることが出来ず、植松の地より「笠島はいずこ五月のぬかり道」と一句を手向けている。

現在、中将実方朝臣の墓のそばに、西行法師の歌碑があり、参道入口には芭蕉の句碑がある。また、仙台の歌人松洞馬年の句碑が「かたみのすゝき」のかたわらに建っている。

明治41年(1908年)5月、愛島村及び有志の浄財により墓所の周辺を整え、実方の顕彰碑を建て盛大に910年祭を行なった。後に昭和17年(1942年)12月20日、愛島村教育会主催により藤原実方卿の945年墓前祭が行われた。

また、没後千年にあたる平成10年には、名取市主催により「藤原実方千年祭」と銘打ち、10月25日に墓前献詠会等の催事が盛大に行われた。

以後、毎年短歌を全国から募集し、10月第3日曜日に墓前献詠会を実施している。



平安時代の初期に編纂された法制書「延喜式」巻9・10の神名帳に記載された神社を式内社という。陸奥国には100社あり、古代の名取郡には2社あって、この神社はその内の一つであり、実方の墓の北側丘陵上に位置する。

文政元年(1818年)この地に移築され、その後明治30年頃、佐倍乃神社へ合祀された。地元の方々によって現在の地に復元されている。

〈式内社・佐具叡神社跡〉(愛島塩手字北野)

実方顕彰の歌碑

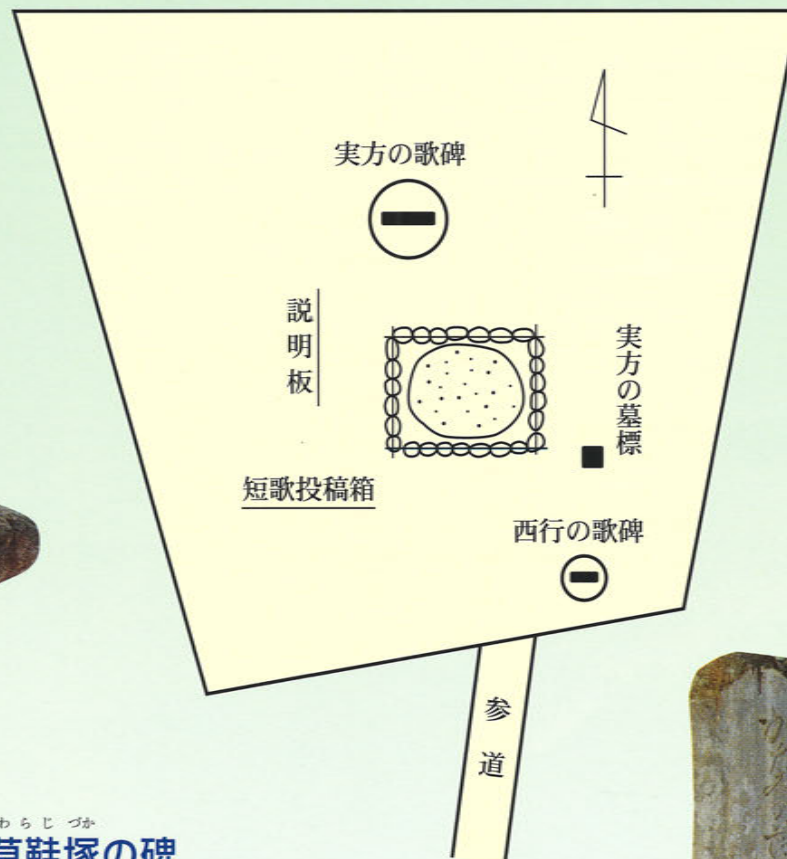
この碑は、中将実方朝臣の墓の左手後方に位置し、横1.5m、高さ0.5mの台上に高さ2.8m、幅1mの稲井石で「桜がり、雨はふりきぬおなじくはぬるともはなのかげにかくれむ」の歌が万葉仮名で美しく刻まれている。

明治40年11月
水戸藩士友部仲吉撰
高島張輔書
仙台佐藤源平刻

※続群書類従第三十二輯下所収
『撰集抄』出典では「桜かり雨は
降きぬ同しくはぬるとも花の
陰に宿らん」となっている。



〈中将実方朝臣の墓平面図〉



実方の墓標



わらじづか 草鞋塚の碑

仙台的歌人松洞馬年の句碑
『笠島はあすの草鞋のぬき処』

かたみのすすき

このすすきは葉が細いもので
一般のすすきに比してせん毛
が少ないといわれている。



西行法師の歌碑

文治2年（1186年）秋、西行法師が
訪ねた折、詠んだ歌が刻んである。
『朽もせぬそのなばかりとどめおきて
枯野のすすきかたみにぞ見ゆ』

（明治40年11月 増田の莊司益吉立石）

年号(西暦)	中将実方朝臣に関する年表
—	生まれた年は不明
天延三年(975年)	侍従に任命される
永観二年(984年)	左近小将に任命される
正暦二年(991年)	右近中将に任命される
正暦五年(994年) 9月8日	従四位上左近中将
長徳元年(995年) 1月13日	左近中将兼任で陸奥守に任命
長徳元年(995年) 9月27日	陸奥国赴任に当り叙正四以下
長徳四年(998年) 11月13日	任地にて没(四十歳前後)

中将実方朝臣ゆかりの地名

ま	たて	ち	暴走した馬を茲めたという所
馬	停	地	
寓	舎	宅	怪我をした実方が土地の人の家にかつぎ込まれた
(仮宿)			そこを仮宿として介抱された。
ふみ	すて	やま	実方が京の友人へ手紙を出そうとしたが果たせず、
文	捨	山	これを捨てた所
かばね		ざき	われ神罪によってこうなった。死せし後屍を2、3日
尸		崎	さらして後人の戒めとせよの遺言により実方の屍を
			さらした所
かま		ば	実方を火葬した所
釜		場	
笠	掛	の	われ死せる後京より家人訪ねて来たらん時の印に
		松	常用の笠をかけて置くべしの遺言によって掛けら
			れた松。現在はなし。



短歌投稿箱

中将実方朝臣の墓の位置図



《交通》
東北本線名取駅下車
タクシー10分